

知恵の樹

No. 138 2009. 3. 18

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局：町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243

図書館、走る！ ～利用者と仲間の想いをのせて～

町田市立堺図書館 井上 保

私は、移動図書館車「そよかぜ号」の運転を担当しています。事故の無いように細心の注意を払い、1日2～3箇所、合計24箇所のステーションを巡回しています。事務職員の仲間2、3人と同行しますが、勤務ローテーションの関係上、同じステーションに毎回行くことができるのは私だけです。必然的に、各ステーションの利用者を一番よく知っているのは私、ということになります。そのことを生かして、出発前には館内から資料を選んで車に積み込む作業も行っています。

移動図書館車に載せられる資料は約4000冊。図書館の開架数から比べると極々僅かです。そこで、より利用者のニーズに答えられるような開架にする必要があります。移動図書館の巡回に合わせて足を運んで下さる利用者の皆様が満足していただけるように、又続けて来ていただけるように…と想いを込めて、私は1冊1冊資料を入念に選んでいます。

今回は、巡回する中で心に残った体験をいくつかご紹介させていただきます。

〇月〇日 晴れ Aステーション

私は余裕のある時、出来る限り利用者に話しかけるよう心がけている。世間話から発展、様々な会話を交わすことで、その利用者がどのような資料を欲しているのかを知ることが出来る。そうして得た情報は、次回巡回時の積み込み作業に反映させる。用紙に希望する資料を書いてリクエスト

する方法もあるが、大半の利用者は書架に並んでいる資料を見て、ご自分でお選びになって借りていかれるのだ。

この日は雲ひとつなく、抜けるような青が気持ちよく晴れた空だった。通常30名位の利用者が訪れるこのAステーション。その中に、よく足を運んで下さる70歳前後の利用者がいる。

私は普段利用者に対して、「何かご希望の本がございましたら、次回車に載せてきますよ」とお聞きする。そうすると概は、「ある本から選びますから大丈夫ですよ」とか、「じゃあ、今度来る時にこの作家の本を持ってきて下さい」などのお返事をいただける。

しかしこの利用者は違っていた。過去2度程そのようなお声をおかけしたが、殆ど無視されたような具合で、お返事をいただくことが出来なかった。そこで私は一計を案じた。前回この利用者が借りていかれた小説と同じジャンルの小説を今回さりげなくその利用者の目に付くところに置いておいたのだ。すると、他の本には目もくれずその小説を手にとられた。

「今日は選ぶ手間が省けた」と微笑んで借りて



いかれた。私は平静を装い、微笑んで去られるその利用者の後ろ姿を見送ったが、心の中は小躍りしていた。その出来事以来、Aステーションにそのジャンルの小説を用意していくことを私は忘れない。後からわかったことだが、この利用者は耳が少し遠いようだ。会話を交わすことはなかったが、その方の一言と笑顔によって、心のコミュニケーションが取れた、そんな気持ちになれた清々しい午後だった。

〇月△日 曇り Bステーション

前々回このステーションに来た時のことだ。いつものように配架をしながら、ある利用者にお声をかけた。書架の一番上に、約100冊のハーレクインのコーナーを設けているのだが、その利用者は、「私、この本殆ど読んじゃったんです」とおっしゃった。

実はこのコーナーの8割程を2日前に入れ替えておいたばかりだったので、正直私は少し落胆した。しかし心機一転、その次の巡回には全部を入れ替えて臨んだ。そうすると、「やっぱり以前読んだ本です。でもいいですよ。又読み直しますから」とのこと。なんとなく釈然としない。そんな気持ちを抱えたまま図書館に戻り、司書資格を持つ仲間に事情を説明した。するとその仲間は、比較的新しいハーレクインを他の館から取り寄せて用意してくれた。

そしていよいよ今回の巡回だ。用意したハーレクインをその利用者に見てもらった。すると、「新

しいのがいっぱいだわ！」と、大変喜んで借りていかれた。私は巡回から帰って、すぐに仲間に報告をした。二人で顔を見合わせて、喜びを分かち合った。利用者の喜びを仲間と分かち合える、そんな瞬間が大変心地よかった。

以上、2つの出来事を書き綴りましたが、これはほんの一部です。毎日の巡回で触れられる利用者の笑顔が何よりの活力源です。移動図書館の運行は、夏の暑さや冬の寒さ、雨などの気候や天候に、やる気が左右されがちになってしまいますが、そんな中でも足を運んで下さる利用者から「ご苦勞様です。いつも来てくれて有難う」との言葉に背筋が伸びることもしばしば。利用者あつての移動図書館だなあ、とつくづく感じます。

また、幼稚園児や小学生に「気に入った本見つかった？」とか「この間借りた本面白かった？」と尋ねると、逆に「こんな本ないの？」と返されることがあります。私は児童書にあまり明るくありませんので、こういった場合は同行した司書資格を持つ仲間が助けてくれ、本当に心強いです。

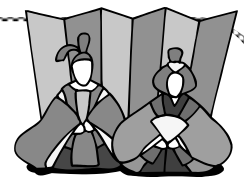
移動図書館は屋外で開放的なので、遠慮なく利用者と何気ない会話を交わすことができます。そうした会話から一人一人の利用者の求める資料を自分なりに理解し、書架に反映させることで、微力ながら利用者の満足を得られ、又貸出数の増加に繋がると信じています。

利用者の想い、仲間の想い。そしてたくさんの資料をのせて、今日もそよかぜ号は走っています。

お雛様

中央図書館児童コーナーの、七段飾りをご覧になりましたか？タウン誌にも紹介されたので今更なのですが、40年程前のものだそうです。先日久しぶり

に夜間の児童カウンターに入った折、おじいちゃんとお孫さんがひとしきり眺めてから「いいですねえ」と、しみじみおっしゃってお帰りになりました。暫くして今度は男性がお一人でいらして細かな所までじっくりと眺めて、「今のものとはお顔も着物も違いますねえ」としきりに愛でて下さいました。いつもの図書館ではない空間が広がって、私のお雛様ではありませんが何だか嬉しくなりました。伝え受け継がれてきた良いものは、年齢や性別をを超えて心に届くのだと、これまた今更なのですが思った次第です。読み継がれてきた本もしかり。お雛様の一番下に鎮座している（図書館特製人形！）「ねぎぼうずのあさたろう」と「くろずみ小太郎」も、読み継がれていくのでし



広瀬 恒子氏講演会「2008年 子どもの本をふいかえて」

3月7日(土)、恒例となった、広瀬恒子さんに子どもの本の動向を語って頂く講演会「2008年子どもの本をふいかえて」が、町田市立中央図書館6階ホールにて町田の図書館活動をすすめる会主催で開かれた。参加者は38名。語ってくださる物語とその分析の面白さを堪能した2時間余だった。(報告: 高橋)

■世情を反映したある再版

経済不況を背景に、文学の世界で『蟹工船』ブームが起きたとの同様に、児童文学の世界でも30年前に出版された『白赤だすき小○(マル)の旗風』【後藤竜二】が再版された。この作品は南部藩政下の農民一揆をテーマにしたもので、子どもの本もまた、社会の動向とは無縁でないことを強く印象づける魅力だった。

■2008年のトピックス

石井桃子さん、「ノントン」シリーズのキヨノサチコさんが逝かれた。石井さんの功績は周知のことだが、キヨノさんについても、70年代に公立図書館にノントンを入れるかどうか議論になったこと、その一方で子どもたちには圧倒的な支持を得たことなど、日本の子どもの本を語る時、対照的なお二人だった。

発行部数3億5千万部という、のけぞるような数字が残されたハリーポッターの完結。これも専門家からは厳しい評価もあったが、子どもだけでなく大人にも読まれたという、近年のボーダレス化を示すものでもあった。

■エンターテインメントが目立つ出版動向

2008年児童書新刊の総点数 3,555点

文学 909点(25.6%)

絵本 1,486点(41.8%)

ノンフィクション 389点(7.6%)

出版点数は昨年度とほぼ変わらないが、全体の約42%を絵本が占めているのは、読者層のボーダレス化、アートとしてのジャンルの確立と見ることができ、それに伴う問題(文章の抽象性など)も含んでいると考えられる。全体としては、『若おかみは小学生!』『黒魔女さんが通る!!』などに人気があり、エンターテインメントへの傾斜が目

立った。

■印象に残った児童文学・ジャンル別

【絵本】

乳幼児向け: 『ももんちゃん』シリーズ、三浦太郎の作品などはよく読まれているが、そのほかはこれまでのものの亜流パターンが多く、赤ちゃんの絵本の難しさを感じさせる。そのなかで、オリジナリティが感じられたのは『あっ!』『つかんでばっくん』は動物が自分の手にあたるもので、食べ物をどう食べるかを描いており、実践現場では反応がよかったという。『かにこちゃん』は故堀内誠一による色彩が美しい。

子どもの日常に身近な絵本: 子ども向けであるにもかかわらず、子どもの日常から始まる絵本は意外に少ない。そういうなかで、『はなやのおばさん』『てぶくろがいっぱい』『クリスマスのおふしぎなはこ』『おかえりたまご』は、それぞれ子どもの日々の心の動きや、周りの人とのなげない言葉のやりとりによる交流をあたたく描いている。

異色絵本: 憲法を絵で表現した『えほん日本国憲法』、障害のある青年が自分の思いを描いた



『ヘンテコリン』、アイヌの昔話を美しい刺繍が綴る『セミ神さまのお告げ』が、それぞれ独特の表現で異彩を放っていた。

おはなし会などで活用できる絵本: 国によって動物の鳴き声はそれぞれに違うのに、牛だけはどこでも同じという、ほんとかどうかは分からないが(笑)、現場で反応が大きかったのが『うしはどこでも「モー!」』。

写真絵本: 『これがほんとの大きさ』『きらきら』『カワセミー青い鳥見つけた』が着眼点の面白さで新味が感じられた。1930年代に出版され、写真絵本の古典とも言える

『ねむいねむいちいさなライオン』が再版されたが、見た人の評価は一律に「やっぱり古い」。写真というものの特質を考えさせられた。

命と死・人権にかかわるテーマの絵本：『どうして?』『死神さんとアヒルさん』『ひとりぼっちのアヒル』、いずれもアヒルを主人公にした死や愛を考える作品だが、これに『くまとやまねこ』も含めて、それぞれ絵の力などは強いものの、表現の抽象性に少しひっかかりを感じる。学校教育のな

なかで、命の重さを伝えることが大きなテーマになっているが、子どもの感情との間に隔たりがあるように思う。その中で『てんごくのおとうちゃん』は自分がどう父の死を受け入れているかという子どもの気持ちを描き、印象深い。また、『この世でいちばんすばらしい馬』『ヘンリー・ブラウンの誕生日』は、苦しい時代にどう生きてきたか、主人公たちの気持ちに共感できる。

わたしの良かった1冊：『かさの女王さま』タイの伝統ある傘作りの村で育つ少女の話。蝶と花しか描いてはいけない村で、少女は好きな象を描いて王さまに傘の女王に選ばれる。子どもが古いものを乗り越えていく姿を描き、しみじみといいなあと思える作品だった。

【読み物】

後藤竜二：子どもの心を描く作品が少ないなかで、今年は後藤のエネルギッシュな仕事が目をつけた。『1ねん1くみ』『3年1組ものがたり』など、特に幼年向けとして『おにいちゃん』は小さい妹へのうらやましさの一方で意地を張る兄の、ありふれているけれど、子ども心をよくとらえた現実感のある作品で、今年のベストだと思う。

中学年向き：『先生と老犬とぼく』は大人の言葉がどれほど子どもをがんばる気持ちにさせるか、『ハナと寺子屋のなかまたち』は新しい知識や遊びを知ることが、子どもの成長にとっての励ましになるということが、それぞれあたたかい。

高学年向き：『氷石』『ぼくがバイオリンを弾く理由』(第1回ポプラズッコケ大賞奨励賞)はそれ

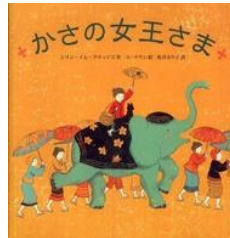
ぞれ少年が自立に向かうプロセスを無理なく描いており、自分の目指すものを意識する年代の子どもたちの共感を得られると思う。今の若い人に不人気の「文学」だが、『流れ行く者』はさすが上橋菜穂子の手になるもので、文学表現の魅力を味わわせてくれる。やりきれない時に生きる意欲をかきたてるのは、その人の記憶の一場面という視点がユニークな『ドリームギバー』も良かった。

YA向き：親になりきれない大人が増えている。自信や希望が持てない、あるいは絶望だけが共通点という親子関係を描いた『メジルシ』『スリースターズ』。評価の分かれる作品だが、文学が現象の後追いになってしまっている。そこから脱却するための、先取りする何かを提示してほしいと思ってしまう。これに対し、『戸村飯店青春100連発』はノーマルでありながら豊かな家族関係を描いてさわやかだ。『縞模様のパジャマの少年』『ムーンレディの記憶』は共にナチズムに引き起こされた悲劇が描かれつつも、現代への視点もきちんととらえられている。特に80歳のカニグズバーグの構成力はすごい。今年最も印象に残ったのは『殺人者の涙』。人間的感情を持たずに生きてきたならず者が、子どもとの出会いに揺り動かされる内容は、評価が分かれるところだろうが、議論が深まるという意味でも刺激的な作品だった。

■子ども読書に関わる動きの中から

堺市立図書館でのボーイズラブ貸出中止問題、『人はみな裸になる』回収要求運動など、「くさいものにはふた」というような動きがあったが、作品は厳しい批判、読者によって淘汰されるべきであり、改めて言論や図書館の自由について考えさせられた出来事だった。

横浜市について図書館の指定管理者制度導入が決めてしまったが、反対運動に立ち上がった方々が、アメリカの高校生の言葉をオバマ氏が引用したことで有名になった「我々は簡単にあきらめる人間ではありません」(We are not quitters)という言葉で報告を締めくくっていたことが大変印象的だった。



神奈川の図書館を考えるつどい

「未来をつくろう 図書館で！ Part4」に参加して

さる3月8日(日曜日)に神奈川の図書館を考えるつどい・2009に参加しましたので、報告します。

今回は小田原市立かもめ図書館で行われた。午前は酒井貴美子氏(国際子ども図書館)「毎日の仕事から…近い国、遠い国の子どもの本」、午後は才津原哲弘氏(元滋賀県能登川町立図書館館長)「地域社会と図書館の役割」の講演、次いで「地域からの報告」として小田原、南足柄、秦野、横浜の各地の図書館状況について報告があった。途中参加のため、才津原氏講演と地域報告のみに触れる。

◆才津原哲弘氏の講演について

演題「地域社会と図書館の役割」

才津原氏は、1946年広島生まれ。千葉県八千代市立図書館、福岡市民図書館、福岡県苅田町立図書館に勤務され、滋賀県旧能登川図書館の設立に準備室長として携わり、1997年に館長就任。2007年3月に定年退職され、現在は福岡県二丈町にて農業を営みながら、図書館に関する講演活動をされている。今回の講演では、能登川町立図書館や各地の図書館、市民活動の事例を紹介されながら、市民にとって図書館とはどのような様にあるべきかを考える内容であった。以下概略を紹介する。

「良い図書館は決して天から降ってこない」といわれる。良い図書館は行政に任せているだけでは、決して手には入らない。地域の暮らしに役立つ図書館は、住民の深い関わりから生まれるのであり、その関わりこそが、市民の願う図書館を生み出す力である。そのためには、市民自身も「地域に図書館があるとはどういうことか？」と問いかけていく必要がある。図書館の役割とは何か？図書館が地域にあるとこの意味を考えることで

あるという。

また自治体の仕事は、地域に住む住民が、一人では出来ないことをその地域を住みよい場所にするために税金を出し合って実現することである。図書館を地域に作るということは、地域住民の様々な情報要求に応えることであり、提供した本が人を癒し、生きる力を与えることもある。そうして地域を住みよい場所に変え、住み続けたい、そういう思いを次世代にも伝えていく、そういった働きもある。

どんなに良い図書館があっても、その図書館が利用者の生活圏内に無ければ「地域の図書館」とは言えない。徒歩や自転車での移動を含め、日本の場合は一中学校区に一館必要であるという。一方、直近に住む人が利用しないのではこれも駄目であるともいわれる。原因として、本＝教育、学校というイメージから「もういい」と感じる事が指摘される。しかし、本＝役立つ、趣味など生活と密着した利用や楽しみ、癒しがあることを知ってもらう努力も地域の図書館としては必要である。

まず自分の住んでいる地域の図書館のあり様を正確に知る必要がある。何がなされ、何がなされていないのかという批判ではなく、例えば、小学校区別に住民の年間利用冊数を統計にまとめれば、各地域における求める図書館像が探ることが出来る。そして住民自身がまず「私の図書館」を考え、それを元に「みんなの図書館」、さらに押し広げて「地域の図書館」の求める姿を描いていくことが大切であるという。公共図書館を巡る現状は非常に厳しいが、それまで見えなかった問題点が見えてきたことに他ならない。それを考えれば良い。しかも全国で様々な図書館活動が行われているのであるから、決してゼロからのスター

トではないことも強調された。

◆地域からの報告

小田原の図書館を考える会、南足柄図書館だ
いすきの会、秦野の図書館を考える会、横浜の
図書館の発展を願う会の紹介と各地域図書館
の現状と市民活動の様子が報告された。南足柄、
秦野では指定管理、委託導入が検討されつつあ
る現状と市民の反対活動が報告された。問題が
表面化してから市民が活動を組織している事
例が多く、市民には問題の本質が知られないま
ま、経費削減優先で計画が進む傾向が見受けら
れた。委託、指定管理導入は、むしろコスト高
になる事例が多い。市民も行政も「なぜ地域に
図書館があるのか?」「図書館は何をするところ
か?」を普段より考えるべきである。図書館
が地域にあることの大切さを多くの市民が実
感することこそ大切である。また図書館におい
て自治体が市民に対する責任を果たすために
は、委託や指定管理はそぐわないことも知るべ
きである。(山口 洋:会員)

新聞記事からフックトーク

アメリカ国立公文書館

町田市役所 石井 一郎

2月1日の読売新聞の1面に太平洋戦争で捕虜に
なった後、死亡した日本兵6千人の名簿が見つかった
という記事が載っていた。NPO法人「戦没者を
慰霊し平和を守る会」から依頼された調査会社が、
アメリカ国立公文書館で見つけた。名簿には氏名・
階級・死亡日・死因・埋葬場所などが記載されてい
た。

名簿があったアメリカ国立公文書とはどういうと
ころだろうか。知る本としては、『研究者のためのア
メリカ国立公文書館徹底ガイド』仲本和彦(凱風社
2008年)がある。著者は沖縄県の公文書館の職員。
アメリカ国立公文書館で沖縄関係の資料を収集して
いた経験を基に書かれた。研究者向けに書かれてい

授業で出会った学生たち ⑨

山本 宣親

薬を飲むA子の手が震えている。教え子であ
った彼女はF市の採用試験に正規職員として合
格し、同級生から羨望されていた。でも、1年
後の何という変わりようか。精気が消え表情も
硬い。A子はここを病み休職療養中であった。
彼女は図書館司書を希望したが、その採用枠が
なくやむを得ず一般事務職を受けた。回り道を
してもいつか図書館に配属されることを願っ
た。

病の原因は職場環境であった。仕事を通して
市民の役に立ちたいと願い就職したが、先輩や
上司の仕事振り、無愛想な市民との応対にスト
レスが溜まり、理想と現実のギャップに収拾が
つかなくなってしまったのだ。気がついた時、
医師の治療を受ける身となっていたと言う。

今の若者は仲間内で盛り上がるのが好きな
ようだが、それは見かけだけ。精神面はひ弱で
貧しくところは淋しい。また、内面を語り合う
人間関係が希薄のようだ。困難を乗り越える力
は、子どもの頃からの読書力に支えられること
が多い。本は人間に成長するための食べ物だ。

しかし、今のA子には当面メンターが必要と
思っている。その役割は、

るが、一般の人にもわかりやすい内容となっている。
出発準備から始まり、公文書館へアクセスから手続
き・調査方法が述べられている。最後に付属機関の
歴代の大統領図書館まで触れられている。

沖縄県や国会図書館で日本関連の資料を収集して
いるので、日本でも見られるようになっているが、
どんな資料があるのだろうか。資料を使用した本と
しては、『米軍資料から読み解く愛媛の空襲』今治明
徳高等学校矢田分校平和学習実行委員会編(創風社
出版2005年)がある。今治明徳高校矢田分校の総合
学習から生まれた本。高校生たちが作った本だが、
読み応えがある。本には、アメリカ国立公文書館所
蔵の写真や戦闘報告が掲載されている。

アメリカ国立公文書館関連の本を2冊紹介させて
もらったが、両方とも力作なので是非一読を。

講演会「学校図書館はたのしいところ！」報告

講師 渡辺千津子氏（調布市立杉森小学校図書館専門嘱託員）主催：町田の学校図書館を考える会

2月22日（日）13：30～15：30

町田市立中央図書館6階会議室にて

参加者 27名（事務局5名含む）

参加者が少ないのではないかと心配していましたが、開演5分前に大勢集まってくださり、にぎやかな講演会になりました。

調布市の学校図書館の沿革 小学校20校、中学校8校に専門嘱託員として司書が配置されている。

（平成17年～全校配置、週4日年196日、専任、有資格者、有給・産休あり）年1回の研修だけでなく、毎月1回事務連絡会を開いている。連絡が付きやすい学校数だと思う。3～5年で移動。（初め1年ごとの移動だったが、現場からの声で延長された。）物流は宅配業者にファックスで注文すると翌日配達してくれるシステムになっている。

杉森小学校の様子 市内で2、3番目に大きい学校。21クラス。落ち着いて学力は高い。図書館に人が集まる。本好きの常連が多く、活気に溢れている。天気の良い日は2教室分の図書館がいっぱいになって大変。

専門嘱託員について 勤務は火曜～金曜の9：00～14：45（1時間休憩）。いつも開館してあげたいので、月曜日は、有償ボランティア（¥2000）として来ている。土曜日などの学校公開日や夏休みのプール開放日も開館（196日内で調整）。冬休みと春休みは閉館。

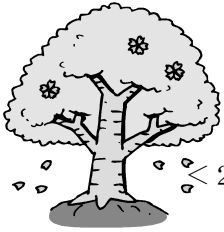
杉森小学校での実践 全21クラスの図書の時を担当。（利用報告の資料、ちらし・アニメーションやオリエンテーションに使用している資料など、沢山用意して見せていただきました。）各学年の年間カリキュラムに沿ってオリエンテーション（公共図書館員がガイダンスを担当）、ブックトーク、アニメーション、ストーリーテリング、読み聞かせなどを実践している。定着してきた行事は2学期の『本の宝箱』（休み時間に読み聞かせ）、6年生3学期の中学校司書の出張授業（新中1の貸し出し数が2倍増に！）がある。おまけカード（行事参加のご褒美として、普段の2冊1週間貸し出しにプラス1冊余計に借りられるカード）が人気。1年生への初めてのお便り

は、実は保護者向けのお便りで、保護者に学校図書館を知ってもらう意図がある。予約は是非やってほしいサービス。公共図書館との連携も大切。（学校の利用計画を年度初めに渡しておき、メールやファックスで注文し配達日を指定して届けてもらう。）図書館ボランティアで全面的に協力してくれる方がいて、その方が創作（装飾、掲示、工作など）を担当してくれているので、成り立っている。学校全体が協力的で、各クラスに読み聞かせのお母さんが居てくれるし、図書館を大事に思ってくれる管理職、運搬を手伝ってくれる事務の方たちなどによって、図書館が成り立っている。

1時間ほどの講演の後は質問の時間に。図書指導員の参加が多かったので、実践的なことについての質問が沢山出た。有償ボランティアについて：月曜日はそういう立場で勤務しているので、授業は入れてない。週5日導入への妨げとの批判もあるが、今の制度においても、毎日開館したいからという思いでやっている。月1回の連絡会について：連絡会はほとんど事務的な連絡のみ。自主研修で実践報告して情報交換している。プライバシーの問題について（町田は昔ながらの貸し出しカード使用がほとんど）：誰がどんな本を読んだかは、絶対に秘密厳守。図書委員にもその指導は徹底している。オリエンテーションでも話をしている。貸し出しカードは早く電子化すべき。本嫌いの高学年に興味を持ってもらうには？：難しい。科学実験やアニメーションがおすすめ。CDを聞かせる授業も人気があった。とにかく、図書館が楽しくなるネタを色々考えて工夫してほしい。

最後に、『なんげえ はなしっこ しかへがな』（銀河社）の読み聞かせを披露、大拍手!! 大変有意義な時間を過ごせた喜びと同時に、町田の実態とのギャップを感じさせられた。

参加された方々から「具体的でわかりやすく、とても参考になった」という感想が寄せられた。学校図書館の管理運営に携わって、何をどのようにやったらいいのか、誰に相談したらいいのかなど、指導員の方々が悩んでいる様子が垣間見えた。これからも、学校図書館を充実させるための、また指導員のサポートになるような活動を会として進めていきたいと思う。（報告：市川・伴）



ひろば

< 2月例会報告 > 18日(水)

16:00~会報印刷

18:00~20:30 例会

於・中央図書館中集会室

出席/石井 伊藤 片岡 川野 久保 斎川 手嶋
前島 増山 丸岡 水越 桃澤 守谷 山口

- 季刊「としょかん」がNo109から白黒版に。すずめる会で20部を注文することに。
- 町田市立図書館で嘱託職員募集中。8人の枠に対して130人以上の応募、北海道から九州まで、現職の図書館員が多い。一次作文試験で30名に絞り19日に二次試験。
- 鶴川駅前図書館の基本計画ができる。市民部が関わる。図書館は直営ですることについて市長も了承の様。駅前にある図書館の分館というスタンスで現鶴川図書館を考えている。地下をどうするか、図書館カウンターを3階に置くかなど、まだまだ検討課題多し。2011年竣工予定。
- 都立図書館の見直し案、最終案が提示される。刊行後30年を経た本は貸出なし。また期間を35日から28日にする。多摩の館長会としては意見書を提出

自治労都本部図書館交流集会

2/2(月)『官製ワーキングプアと図書館 シンポジウム「非正規職員として働く」』をテーマに、荒川区図書館・中野区NPOげんきな図書館とともに、町田図書館嘱託員の原澤がパネラーとして参加しました。各館とも不安定な雇用条件下で仕事に追われ、モチベーションを維持するのが大変な中、独自にスキルアップ講座を設けたりしながら力をつける努力をしている様子が報告されました。背景には司書としての仕事にこだわりを持って働き、常勤職員と同じ仕事を担っているにもかかわらず、待遇面が改善されにくい現状があります。社会的にも非正規社員のあり方が問題になっています。この機会に、市民の皆さんも一緒に考えてみて下さい。(S記)

●2009年度 第1回 文学館(主催)で楽しむ おとなのためのおはなし会

4月16日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム

町田の作家「小山田与清」	増山
「牛になったなまけ者」(朝鮮の昔話)	遠藤(洋)
「さるの嫁さん」(九州の民話)	定岡
「仕立てやのイトチカさんが王さまになったはなし」 (マクシンスキー作・ポーランド)	遠藤(美)

<語り: まちだ語り手の会> 直接会場へ! 保育申込

まどさん100歳展 3月28日~5月6日

銀座教分館9階ウエンライトホール

大人800円 小中学生200円 (主催:教分館他)

する方針。八王子図書館は館長として都立への要望を表明している。町田でも図書館協議会として再度要望を出す予定。

●3月7日の広瀬恒子氏講演会及び14日田井郁久雄氏講演会の役割分担などを決める。

●町田の学校図書館を考える会では、主催講演会(2月22日)チラシを全校に発送。25日には成瀬台中学校新図書館内覧会。一昨年文科省新教育システム開発プログラムに参加したことで蔵書が1.5倍に増え、旧図書館では収まらないことから1階を改装して2倍の広さの図書館になった。市教委だけでなく地域の方へもお知らせしている。また、副市長、指導課長と面談して、学校図書館についての要望書を提出した。有償ボランティアではなく専門・専任の人を公募で入れることを中心に話し合った。回答は思わしくない。次号に報告を。

●町田ゼルビアがサッカーJ2リーグに昇格が決まり、野津田公園の競技場を急遽改修することが市長の独断で決まりかけている。8-10億の予算が市議会を通過してしまう懸念。市民や地域住民になんらの説明もなくトップダウンでことが動いてしまっているのだろうか。署名にご協力を。

あとがき 増山さんが再びアニメーション事情の研究にフランスへと赴いたため、今回はピンチヒッターで水越が会報を担当。字を大きくしようと思いついていたのだが、たくさんの原稿にとっても削ることもできず、結局いつも通りのスタイルに落ち着く。ご協力ありがとうございました。不手際についてはご勘弁を。(M?) …二乗です!